

# エルサルバドル体験記「Alicante で朝食を - Cipitío 探しの旅 -」

福重 一成

目次：

1. はじめに
2. エルサルバドルのまち
3. エルサルバドルの料理
4. エルサルバドルの人々
5. おわりに

## 1. はじめに

筆者は、教育学、民俗学を研究している大学の教員である。2020年3月、勤めている大学の学術協定校であるホセシメオンカニャス中米大学（以下、UCA）へ日本語教師として派遣される予定であった。しかし、コロナウイルス感染拡大によりエルサルバドル行きが中止となり、オンラインによるUCAの先生とのミーティングや日本語教育支援活動を開始した。2025年現在もオンラインによるエルサルバドルの方との交流は続いており、UCAの先生だけでなく、エルサルバドルで日本語を教えている教師や、日本語を学んでいる学習者を対象とした（読書会、おしゃべり会、JLPT学習支援など）様々な活動を実施している。これらの活動を続けていく中で、大使館、国際交流基金、JICAの関係者や、中米カリブ地域の先生方と知り合うことができ、2025年8月、「第16回中米カリブ日本語教育セミナー」（エルサルバドル開催）の基調講演、招待講演の依頼を受けた。

筆者の研究対象であるエルサルバドルの先住民ピピル（Pipil）の民間説話の中で現地の人々に特に人気なのが、シピティオ（"Leyenda del cipitío"）だ。シピティオは、母親であるシワナバ（"Leyenda de la siguanaba"）の浮気のせいで、雨の神から呪いをかけられた、大きな帽子をかぶったキャラクターだ。見た目は永遠に十歳の少年のままで、小柄で腹が出ており、足のつま先が後ろ（反対側）を向いている。シピティオはイタズラ好きで、水浴びをしている女性の服を隠したり、小石や花を投げたりする。しかし、彼の姿は男性にしか見えないため、イタズラをされた女性は何が起こったのかまったくわからないそうだ。また、シピティオは一瞬で遠くの場所に移動する瞬間移動の能力を持っているという。

今回の旅の目的は、第一に、オンラインで交流しているエルサルバドルの先生、学生たちに会いに行くこと、第二に、セミナーに参加される中米カリブ地域の先生方との交流を深め、人脈を広げること、第三に、シピティオに会いに行くことである。本文では、エルサルバドルに滞在した5日間を、エルサルバドルの料理、まち、人々を中心に述べていきたい。

## 2. エルサルバドルのまち

エルサルバドルの先生や学生とはオンラインで数え切れないほど交流を重ねてきたので、彼らと対面で会えるのがとても楽しみだった。ただ、中米ははじめてで、スペイン語ができず、飛行機での長距離移動も不安であった。約一日かけて飛行機を乗り継ぎ、ようやくエルサルバドルの空港に到着した。疲労や睡眠不足でフラフラと空港を出た瞬間、美しい鳥の音が響き渡り、大きい木々、草花が目に入ってきた。カラッとした暖かい空気、自然のにおい。

到着してすぐに中米エルサルバドルという地が私の五感を満たし、胸が躍った（図1）。

エルサルバドル滞在中は主にセミナーが開催されていたUCAにいたが、フィールドワークで首都サンサルバドルの自然公園、悪魔の門（図2、図3）、手芸品店などを見て回る機会があった。手芸品店の商品（キーホルダーやシャツのデザインなど）、観光地での顔出し看板、ストリートアートなどの至るところに会いたかった彼がいた。そう、シピティオだ。シピティオの他、シワナバやカデホ("El cadejo")にも度々遭遇した。日本の妖怪や河童、狐、天狗などのように、エルサルバドルの民間話の登場人物たちが、現地の人々の生活、心に根付いていることがわかった（図4）。

エルサルバドル滞在中に4泊したサンサルバドルのホテルアリカンテ(Hotel Alicante San Salvador)は、本当に良かった。部屋はとてきれいで、バーやカフェがあり、(今回は泳げなかったが)屋外プールつきだ。朝、目を覚ますと、まず聞こえてくるのは鳥のさえずり。静かな庭に飛んでくる美しい野鳥(トロゴス?)を眺めながら、おいしい朝食をとる時間は、最高に幸せだった。世界観はさながら宮崎駿ジブリ映画『紅の豚』に登場する「ホテルアドリアーノ」。調べたら、アリカンテは地中海沿岸地域の都市の名前で、映画のホテルアドリアーノのモデルはアドリア海に浮かぶ島だそうだ。この楽園、天国のような場所に、機会があったら一度泊まってみることをおすすめする（図5、図6）。



図1. エルサルバドルの空港



図2. 悪魔の門の山道



図3. 霧に包まれる悪魔の門



図4. 顔出し看板・シピティオ（右）



図5. ホテルアリカンテ



図6. ホテルの朝食

### 3. エルサルバドルの料理

エルサルバドルの料理は、炭水化物、野菜、肉とバランスよく摂取でき、どの料理も非常においしくて感動の連続であった。おすすめは、やはりププサ(Pupusa)だ。トウモロコシ粉(或いは米粉)の生地で作って肉やチーズを包んで焼いた、エルサルバドルの国民食である(図7、図8)。クルティード(ピクルス)やフリホレス(インゲン豆)のペースト、トマトソースなどといっしょに食べる。フォークやナイフは使わず手で食べないと、現地の人に(優しく)注意されることがある。キャッサバを揚げたユカフリッタ(Yuca frita)や、メキシコ

のトルティーヤで具材を巻いた料理と違い、オープンサンドスタイルで具がたっぷり、見た目もおしゃれなエンチラーダ (Enchilada) もおいしすぎて感動した。その他、チョリソやエンパナーダス・デ・プラタノ (バナナの揚げ物)、チーズケーキもおいしかった。料理にバナナが出てくると、映画やアニメの聖地巡礼のオタク飯のように、「これがシピティオが大好物のエルサルバドルのバナナか」と感慨に浸ってしまった (図 9)。

飲み物のおすすめは、米、スパイス入りジュースのオルチャータ (Horchata) だ。日本の緑茶、インドのチャイのようにエルサルバドルの国民的ドリンクで、ププサなどの料理といっしょに注文し、ガブガブ飲む。ハイビスカスジュースのハマイカ (Jamaica) も酸味があってさわやかで飲みやすく、オルチャータと人気を二分する。その他、タマリンドジュース、レモネード、パイナップルジュースもおすすめだ。

忘れてはいけないのが、エルサルバドルで一番人気のビールであるカデホビール (Cerveza Cadejo) だ (図 10)。カデホは、犬の姿をしている精霊で、中米各国で人気のある説話の一つである。エルサルバドルのカデホは、白い毛色で青い目をした優しいカデホと、黒い毛色で赤い目をしたカデホが登場する (図 11)。黒いカデホは、夜に出歩く者や、悪人、心がきれいではない者の前に現れて追いかけてまわし、その赤い目で眠らせてしまうという。一方、白いカデホは、黒いカデホが誤って良い人や子どもを狙わないよう、青い目を光らせているのだそうだ。日本には麒麟をモチーフにしたビールがあるように、カデホはエルサルバドルを象徴、代表する精霊、神獣の一つであると言える (図 12)。



図 7. 国民食のププサ

図 8. 複数名で注文したププサ

図 9. エルサルバドルの美食



図 10. カデホビールカンパニー

図 11. 白いカデホと黒いカデホ

図 12. カデホビール

#### 4. エルサルバドルの人々

前述の通り、筆者はスペイン語が話せない。英語も上手ではない。しかし、エルサルバドルでの 5 日間、非常に快適で過ごしやすかった。それは、エルサルバドルで出会う人々が皆親切で、友好的だったからだ。

まず、エルサルバドル初日に空港で出会った清掃業の方は、トイレを探していることを伝

えると、トイレの場所まで案内してくれた（トイレの男女マークの違いまで丁寧に教えてくれた）。

上述のホテルアリカンテのオーナーやスタッフは、常に笑顔で親切に対応してくれた。夜中に水を買おうと部屋を出ると、就寝中のスタッフが跳ね起き、笑顔で水を持ってきてくれた。早朝、朝食前の時間に外を見ようとロビーにおりていくと、スタッフがすぐに食事の準備をしてくれた。アリカンテで4回朝食をとったが、注文したメニューを覚えてくれていて、（せっかくエルサルバドルに来たのだから、エルサルバドルで有名なおいしいものをいろいろ食べたい）筆者の相談に毎回付き合ってくれた。

セミナーが開催されていたUCAにて、飲み物を買おうと一人で学内を歩き回っていたところ、工事現場の作業員に声をかけられ、売店まで案内してもらった（図13）。

あるレストランの従業員は、私が選び終わるまで嫌な顔一つせず、笑顔で注文を待ってくれたし、ププサの調理現場が見たいと伝えると、キッチンに案内してくれた（図14）。

自然公園で見かけた珍しい中米の植物に見惚れていたら、巡回していた警察官に声をかけられ、親切に説明してくれた。

帰国する5日目に乗ったタクシーのドライバーは、走行中ずっと楽しく話をしてくれたし、空港内のあるハンバーガーショップ（日本のアニメとコラボしていた）の場所を警備員にたずねると、スマホで場所を調べ、お店まで案内してくれた（図15）。

スペイン語は「オラ」「グラシラス」「ププサ デリシオソ」しか話せなかったが、拙い英語とボディランゲージがあれば十分だった。エルサルバドルで出会ったすべての人々に感謝したい。



図13. UCA



図14. ププサの調理現場



図15. 仲良くなったタクシー運転手

## 5. おわりに

今回の渡航の目的であった「中米カリブ日本語教育セミナー」については本文ではほとんど触れていないが、本セミナーにはエルサルバドル、コスタリカ、ニカラグア、グアテマラ、ホンジュラス、パナマ、キューバ、ジャマイカ、トリニダード・トバゴなどの日本語の専門家が集まり、報告会や研究発表、模擬授業、文化交流など、非常に素晴らしいイベントであった（図16、図17）。今後も、セミナーで知り合った方々とともにオンラインを中心とした活動を続けていき、中米カリブ地域の日本語教育の発展や民間説話の保護・継承に貢献したいと考えている。シピティオやシワナバ、カデホなど、エルサルバドルの仲間たちともこれから先も付き合っていくつもりだ。

エルサルバドルで5日間過ごす機会をくださった、リバス先生を中心とした日本語教師チーム（図18）、在エルサルバドル日本大使館、国際交流基金、JICA 職員の皆様、各国の日本語教育の先生方には心より御礼申し上げたい。

美しく、あたたかい国、エルサルバドル。またいつの日か、訪れる機会があることを切に願っている。そして、またあの場所で、そう、ホテル「アリカンテ」で朝食を。



図 16. 大使館のレセプション



図 17. セミナーの参加者



図 18. 現地の先生、学生たち



図 19. ホテルでの朝食の様子



図 20. ホテルのオーナーと

福重 一成（ふくしげ かずなり）氏

日本経済大学経営学部経営学科准教授。エルサルバドルを中心とした中米カリブ地域への日本語教育支援や現地の民間説話研究、宮崎県えびの市に伝承される説話、祭祀・年中行事、方言の調査などをおこなっている。